けあ・こみニュース

2019 年 3 月
No.5

発　行　元：日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会
広報委員会：菊地春夫・根本佳奈・荒井隆浩
井堂愛子・濱出昌子・山田幸恵・中島鈴美
ホームページ：http://caring-jp.com

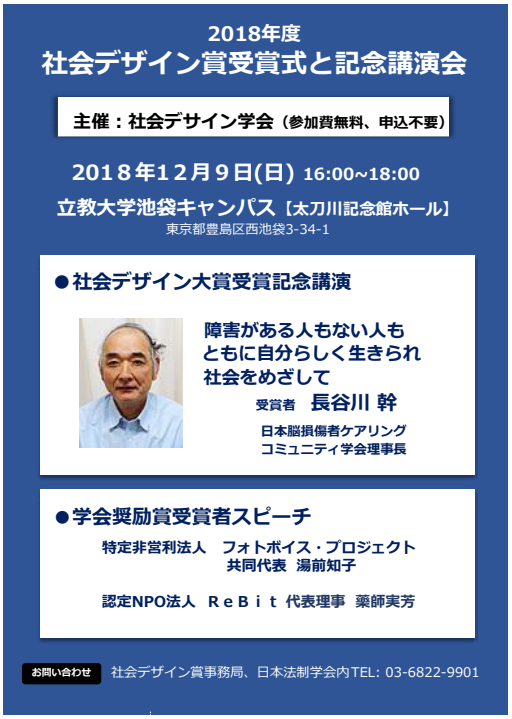
長谷川幹 理事長が「社会デザイン大賞」を受賞しました

当会理事長である長谷川幹さんが、社会デザイン学会主催「2018 年度・社会デザイン大賞」を受賞しました。

社会デザイン学会は「現代社会をその根底から揺るがしている大きな地殻変動の本質を見きわめ、現代社会のパラダイム変換を促し、21 世紀の市民社会のグランドデザインを描くために、また市民社会に必要とされる新しい規範、行動様式、社会運営のスキルを考究し、創造していく（社会デザイン学会会則より抜粋）」学会で、当会で監事を務める北山晴一さんが会長を務めています。

今回の長谷川幹さんが大賞を受賞した理由について以下のように挙げられています。「長谷川幹氏は、リハビリテーションの質を上げるためには、医療者と患者、あるいは『健常者』と『障害者』の間だけではなく医療従事者相互の間にもみられる非対称の関係を見直しケアリングという行為を通じて新たなコミュニティを作っていくことが不可欠であると述べている。（中略）…2010 年には『日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会』を組織し、リハビリテーション理念の革新とコミュニティの革新をつなげる活動を展開している。…ここに見られるような長谷川氏の理念と、そうした理念に裏付けられた日々の活動は、社会デザイン（学）の理念を学術および実践活動の両面で体現しており、＜大賞＞に極めて合致するものである。（「『2018 年度　社会デザイン賞』受賞理由」より抜粋）

「学会激励賞」には NPO 法人「フォトボイス・プロジェクト」、認定 NPO 法人「ReBit」が受賞しました。いずれの会の活動も、社会の中で置き去りにされそうな課題に目を向け、実践活動を展開している会です。立教大学太刀川記念館で開催された受賞式では、長谷川さんと各受賞者が記念講演およびスピーチを行いました。長谷川さんは講演の中で、これまでのリハビリテーション医としての歩みや当学会の活動内容、今後の活動について発表しました。



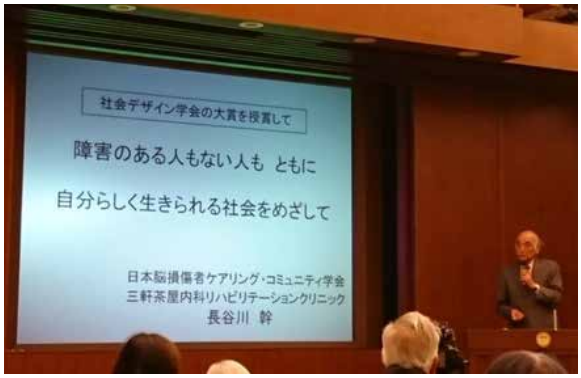
社会デザイン学会のめざすもの

北山 晴一（社会デザイン学会会長）

これまで私たちの社会生活の基盤を支えてきた様々の規範や価値観、それが音立てて崩れさっていく。世紀の変わり目頃から、これは「文明論的危機だ」と嘆く、そんな声が聞かれるようになりました。

しかし、陰極まれば陽となる、の理があるように、現在の危機的状況は文明のパラダイムを転換させるチャンス、私たちの新しい生き方と社会の新しいあり方を構想する好機ではないか。社会デザイン学会は、そんなふうに考える人々が集まって設立されました。

では、新しい生き方、新しい社会のあり方とは、どんなものであるべきか。一言で言えば、それは、出身も境遇も、文化的社会的条件も様々に異なる人々が、ともに生きる歓びを分かち合える社会、少し改まった言い方をすれば、人権意識に裏付けられた真に共生的な社会、ということですが、学会としてとりわけ大事にしてきたことは、その方法論です。専門家目線で「世のため人のため」的に発想するのではなく、つねに当事者とともに考える姿勢です。そうです、これはもう、「ケアリング」の思想そのものでしょう。
別々に設立された私たちの２つの学会が、じつは深い絆で結ばれていることを実感し、感動を覚えます。



＊設立呼びかけ人は、福原義春（資生堂名誉会長）、北山晴一（立教大学名誉教授）
設立日は 2006 年 6 月 24 日
詳細は学会 HP 参照：http://www.socialdesign-academy.org/

第８回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会（しまね縁結び大会）のご報告

大会長　エスポアール出雲クリニック　　高橋 幸男

第８回ケアリング･コミュニティ学会･しまね縁結び大会を、大会テーマ「縁、再び…そして愛」として、平成 30 年７月７日、８日に島根県出雲市で開催しました。平成 22 年の本学会の第１回大会を当地で行いましたので２度目の大会でした。第１回大会の時は精神医療の関係者や行政等の多くの支援を得ながら何とか開催できましたが、その後のケアコミ学会の大会が、本学会の目指しているケアリングの理念に基づいて、多くの当事者たちの参加がみられるようになっていました。今回の大会も、第１回目の実行員会から積極的で主体的な当事者の参画があり、彼らの力を借りながら支援者と共同で開催することができました。

当日は、「平成 30 年７月豪雨」と呼ばれた集中豪雨のため交通網が寸断され、岡山県、広島県、山口県からは一人も参加できない事情の中で、220 名の方に参加して頂きました。副大会長として活躍して頂いた当事者の祝部（ほおり）英明さんのお人柄の素晴らしさに集まって頂いた方も多かったと思います。

大会前日にはプレ企画として横浜ラポールから宮地秀行さんたちが当事者の方々と来雲され、「ボッチャー」や「卓球」で当地の当事者との交流が実現しました。車いすの当事者が初めて卓球に挑戦し「楽しかった」と発言されたことや、『自分の障害を強みに代えて』とした体験報告を聞き、会場は感動の渦で沸き上がったとのことでした。

大会プログラム詳細は紙幅の関係で述べられませんが、当事者発表が多く、共感、発見、気づきと内容の濃い学会であったと思います。当事者・支援者の垣根が低くなったという感想があちこちから上がっていたようです。

最後に、今回の大会運営にあたっては、日頃から当院とのつながりがある医療関係、当事者・家族会のみならず当院がよく利用する居酒屋さんまで多方面のコミュニテイの関係者の方々に協賛いただき何とか可能になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

第８回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会しまね縁結び大会を終えて

出雲 縁 ing トークの会 代表　　祝部 英明

第１回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会を島根で開催してから９年、各地で繋がったケアリング・コミュニティの輪は再び島根の地へ戻って参りました。今回、出雲市での開催ということもあり出雲大社の“縁結び”にちなんで「しまね縁結び大会～縁、再び・・・そして愛～」という大会テーマとなりました。本大会には２日間で延べ約 220 名もの方々が出席して下さいました。

約１年前、不安の中で準備がスタートし、月１回の実行委員会を重ねていきました。開催本大会の実行委員会 33 名のうち、障がいのある方は 12 名、意見を出し合い活動を進めていきました。

私も、本大会では基調報告及び座談会に関わり、そして、大会副会長という経験を頂きました。

この準備の過程では、脳損傷のある人やその人に関わる色々な方々と出逢い、経験談を話したり、聴いたりする機会が多くありました。そのような中で、人と人が繋がり、仲間になり、そして一緒に考えることは、私たちが主体的に行動しようとする背中を押す力になっていくということを確信しました。

私と同じように障害で苦しみ、どん底を経験しながらも、それでも立ち上がっていく仲間たち「出雲縁ｉｎｇ（えにしんぐ）トークの会」を立ち上げたことは私にとって大きな支えとなっています。趣味の写真撮影も生きがいに繋がっていますが、この大会に関わったことで更に色々な意味で人生が動きそうな予感がします。

最後に、皆様のご協力のもと、本大会が盛会に終わりましたことを心より感謝申し上げます。

第９回 日本脳損傷者ケアリングコミュニティ学会開催のお知らせ

「湘南二宮で自然と親しむ！」
～余暇活動を通じた社会参加とケアリングコミュニティ～

大会長　宮地 秀行（障害者スポーツ文化センター横浜ラポール）

鎌倉大仏殿高徳院

建長寺

当学会は、脳損傷者の人々並びにコミュニティで暮らす全ての人々が同じテーブルにつき、地域において主体的な暮らしを実現するための知識、技術を双方向に学びあい、コミュニティにおいて実践し、その成果を社会に広め、共に生きる社会づくりに寄与することを目的としています。そして、年に一度開催される全国大会は、関係者の日頃の活動成果を発表し研鑽を積む場であると同時に、開催地に脳損傷者のケアリングコミュニティづくりを働きかける貴重な機会となっています。

2013 年の第３回大会に続き２回目の神奈川開催となる 2019 年の第９回大会は、湘南二宮町で開催することと致しました。

１．文化芸術交流

今年６月、「障害者の文化芸術活動の推進に関する法律」が施行されました。その基本理念として、「障害者が創造する文化芸術作品等の発表や障害者による文化芸術活動を通じた交流等を促進することで、誰もが心豊かに暮らせる地域社会を実現すること」が掲げられています。そもそも湘南地域は、多くのミュージアム、多彩な創作アトリエやギャラリーがある歴史と文化の地域です。大会の開催を機に、障害の有無を超えて文化芸術活動に親しむ人や関係者が集い、この理念実現に向けた議論を深めることで、文化芸術分野でのケアリングコミュニティづくりの一端を担いたいと思います。

鎌倉文学館

２．神奈川県の観光地域「湘南地域」への提言

江ノ島電鉄

2020 に開催されるオリンピック・パラリンピックを通じて、日本の自然や文化、歴史を感じられる観光地にも海外から多くの障害者が訪れると予想されます。そもそも障害者の旅行に対する潜在的なニーズは高く、支援方法などについては本学会でも以前から委員会の研究テーマとして取り上げてきました。海水浴場を中心とする湘南地域は決してバリアフリーな地域とは言えませんが、その魅力をより多くの人に伝えるために、地元に開設された「湘南バリアフリーツアーセンター」を軸に、旅を支援するケアリングコミュニティを構築し、障害者や高齢者に優しく温かな観光地のあり方を考える機会としたいと思います。

更に、東京オリンピック・パラリンピック前年度開催という時流に乗り「スポーツ」を加え、「余暇を楽しむ」というテーマ設定のもと、湘南エリアの若いリハビリテーション･福祉関係者のネットワークをベースに、一般市民、行政、スポーツ、文化芸術、観光関係などあらゆる人に参画いただき、大会の成功に向け準備を進めて行きたいと思います。

皆さまのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

鶴岡八幡宮

開 催 日 時：2019 年５月３１日（金）　12：00–18：00
６月　１日（土）　９：00–15：00
会　　場：神奈川県二宮町生涯学習センター　ラディアン
〒 259-0123　神奈川県中郡二宮町二宮 1240-10
申 し 込 み：４月中旬頃より参加申し込み受付開始
大会事務局：株式会社モノ・ウェルビーイング内
担　　当：榊原（サカキバラ）
Ｔ　Ｅ　Ｌ：0467-43-7793　　Ｆ　Ａ　Ｘ：0467-43-7792
〈当日受付可〉

ハイリハキッズ

ハイリハキッズは２００７年に発足しました。年々参加家族が増え、今年度から当事者の子どもの参加年齢を見直し、キッズは小学生以下、ジュニアは中学生以上のお子さんとその家族が参加しています。年に６回の定例会を行い、毎回のように新しい家族が訪れ、受傷・発症して間もない家族の参加も増えています。家族の他には、支援スタッフとして千葉リハビリテーションセンターの先生方をはじめ、医療専門職、学生ボランティアの方々が参加くださっています。

定例会では「親の話し合い」と「キッズタイム（保育活動）」を行っています。「親の話し合い」では子どもの年齢に分かれて２時間ほどグループトークをします。各グループに一人ずつ支援スタッフや先輩家族がファシリテータを務め、子育ての悩み等を話し合っています。親が話し合いをしている間、子ども達は「キッズタイム」に参加します。ハイリハキッズＯＢ家族がキッズタイムリーダーとなり、活動プログラムや子どもの保育担当者を決めています。キッズタイムはきょうだいの子ども達も参加可能です。中学生以上のきょうだい児はキッズタイムボランティアとして活動しています。

昨年、一昨年の９月定例会は宿泊イベントを実施し、全国から本障害を持つ子どもと家族が集い親睦を深めました。今後もピアサポートの充実と小児支援の向上を目指して、日々のよかったことや残念なことを多くの方々と共に分かち合っていきたいです。

高次脳機能障害の子どもを持つ家族の会
ハイリハキッズ　　代表　中村 千穂

杉並区高次脳機能障害支援セミナー

３月２日（土）、浜田山会館にて、杉並区高次脳機能障害支援セミナーが開催されました。セミナーでは、高次脳機能障害者の会「RiTa」のメンバーが、輝ける機会となりました。

RiTa とは、杉並区で実施している通所生活リハビリを終了した仲間たちが、近況報告をする場として集まっていたことがきっかけで始まりました。そして、2016 年 11 月に RiTa という名前が決まりました。RiTa とは、仏教用語の「利他」からいただいた言葉です。自分たちも他の誰かのために、何かできることがないかと皆で考えました。

そして、自分たちの症状を自分たちで、わかりやすく紹介しようと、舞台に立ちました。症状によって引き起こされている困った出来事を、面白くなるように演じました。高次脳機能障害の人は、今の自分の力を活かして新しい人生を歩み出していること、私たちも地域の一員として活躍することができる、ということを多くの人に知ってもらえる機会になったと思います。

編集後記

高次脳機能障害の当事者が「主役になる場」をつくろうと始めたこの「春の音コンサート」は、早いもので 12 回目の開催となり、今年も、多くのボランティアを含め 160 名が参加しました。

高次脳機能障害は脳卒中、脳炎などの病気や事故による外傷によって、脳に損傷を受けた後に残る障害です。

最初の出演は，１回目から出演している左半身まひを克服してのバイオリン演奏です。左肩の腕が下がらないように指で弦を押さえてビブラートをかけるのは大変だそうです。2011 年に脳梗塞を発症した女性の素敵な讃美歌、50 代半ばでパーキンソン病を発症した女性のピアノ演奏、例年は、失語症歩みの会のメンバーの皆さんと一緒に参加されていたけれど、今年は、ソロで出演した女性、大好きだったバイオリンを弾けるようになりたいとリハビリを兼ねて練習を続け、今年 18 年目の男性。会場は割れんばかりの拍手が、鳴りやまないほどでした。

高次脳機能障害連合協議会の代表今井雅子さんは、「症状や程度の差こそあれ、不自由な生活の中、新たな生き方を模索し再構築されています。そこには、一人ひとりのドラマがありそれを支える多くの人たちが必要です。」と話します。多くの可能性を秘めていることを学びました。

菊地 春夫